

初期近代英語綴字の一面

(An Aspect of Early Modern English Spelling)

—十六世紀前半—

徳 永 順 吉

我々の眼にふれる Bible や, Shakespeare の作品, Bacon のエッセイなどは大抵 modernized spelling で書かれていて, original spelling をうかがうことが出来ない。ここに 16 世紀前半に出版されたいくつかの作品の原版を見る機会をえたので, 分量が多くないのが残念だが, とりあえず之を元にして当時の spelling の大体を考えてみたい。用いたテキストは

William Tyndale: from “The Obedience of Christian Man” 1528

Sir Thomas More: from “A Dialogue concernynge Heresydes” 1528

from “The Confutacion of Tyndales Aunswere” 1532

Sir Thomas Elyot: from “The Firste Booke of the Governour” 1531

Hugh Laitimer: from “The Sermon on the Ploughers” 1549

テキストを読んでみて気付くことは構文上今日と大差がないのに, 用語にくぶん今日の所謂古語廃語があり, 更に spelling が著しく風変わりに見えることである。

spelling はこの後も動揺をつづけ, 18 世紀 Dr. Johnson がかの大辞典を出すに至つて漸く今日の形に大体定着するに至つたという。之には印刷術の普及, 学校での文法教授が与つて力があつたことと思われる。

さて採り上げたテキストによれば, 当時の orthography は確立してはいなかつた。つまり或語の spelling が人によつて異なるのみでなく, 同 1 人でも 2 様も 3 様もあつた。例えば, More には rede, reead, reders, reading, 更に p. p. に read, red がある。他の語に例をとれば speak の外に speke があり, 今日

の meet を mete, meate で表記している。このような spelling の多様性は、しかし、発音の多様性を示すものではなかつた。Intelligibility の範囲を逸脱しないかぎり適宜その場合場合で spelling を定めたのであろう。勿論そのとき筆者の頭には在来の正字法があつたことだろうが、その正字法とても今日のような精細厳密なものではなく大綱にとどまり、あとは筆者個人の判断に委ねられていた訳である。ただ当時すでに音と綴の乖離はかなり生じて居り、ために或音を写すのに在来の様式をとつたり (e.g. read p. p.), phonetic spelling (e. g. red) に拠つたりしたのであろう。Wyld はこの practice (慣行) を “occasional spelling” と呼んでいる。

今日と比べてもつとも眼につきやすい相異をいくつかあげてみると、まづ所謂 mute ‘e’ の使用が頻繁なことである。Tyndale から例を引けば、

oure, fear, lighte, mighteste, folowe, ashe, thinges, honoure, lawe, Christe, darke, maye, olde, darkely, excepte, shulde, heare, lesse, walke, etc.

反対に wrot, comly, shamfull, wherin, ther, hony, wer, tast, imagen, somewhat, etc. では落ちている。

尤も, therefore の外に therefore もあり, wher-fore の一方 where-with もある。

次に ‘i’ と ‘y’ の使用法について今日では定まつているが、当時はそうした区別がなかつた。Latimer から例をとれば、

hys, tyme, agaynst, Kyng, cityes, whyche, pryde, dyd (=did), dyed (=died), yf, yll, ryche, rytche, wyth, sayd, mynte, reygning, tyranny, wyll, etc.

第3に ‘v’ は語頭に、‘u’ は他の位置に用いられている。尙 ‘u’ を ‘v’ の代りに用いることは17世紀に消失した。More から例をひけば、

vp, vpon, haue, serue, euer, neuer, liuely, euil, vnderstande, vnlearned, vsuall, deuocion, dyuers, reuerently, conuenient, euangelistes, sauour, leuites.

但し Tyndale には every, beleve, love, serveth, geve (=give), have の例もある。

第4に、'j' はまだ一般化せず 'i' が 'j' [dʒ] を表している。前3者ほど用例は多くないが、

iudge, Iewes, Iohn 又は Ihon, iust, abiecte, ioye, preiudice. iudgement, majestie, iauelyns, coniecte (=conjecture), iugulynge, iugledest (=juggle).

但、Elyot には Julius Cesar が2回使われている。「dʒ」音を表すため 'i' に flourish を加えて 'j' を作り之を一般に用いたのは1630頃という。

最後に子音字を1つにするか重ねるかの点で今日の practice と異つた例が多い。Elyot から引例すれば

legges, warres, equall, martiall, fledde, sette, cruell, ennemies, all-myghty.

彼にはしかし enemies の variant もあり、更に More, Latimer に bishoppes, bishop; bishoppe, byshop; somme, some 等 occasional spelling がみられる。

逆に, litle, bely, wel, folowe, writen, arowes, bagage, socour, maner の用例が Elyot にある。

このように1つにするか重ねるかはかなり任意的で他に redles, riddles; shal, shall; of, off; cal, call; wil, wyll; wel, well; litle, little など例が多い。

尙この外、固有名詞は必ずしも大文字を用いず (e.g. israel, the bible, english, christe, etc.), 逆に稀に大文字を用いた例がみられる。又 apostrophe はまだ用いられず従つて単数所有格、複数、複数所有格の区別は context によらねば判じがたい。

扱て以下今日の標準英国語の音を規準にして、之を表記する綴字に相違のある語をみていきたい。尤も当時の音の中には今日のそれと異つているものもある訳だが、ここでは分類の便宜上問わぬこととし、要すれば各項で問題にすることにしよう。まづ母音字、次に子音字をみよう。

(I) 母音字 (Vowel Letters)

Stress のある syllable の vowel に限ることとする。初めに Present-day English Sound を掲げ、次にこの Sound を示す P.E.spelling をあげ、次にこの spelling と異なる spelling の語例をあげることとする。

(1) [i:]

- a) e... bee ME [e:] が15th c.[i:] となつたもの
b) ea... clene, leve, rede, reder, mene, zele. speke, teche, mete, eche, bete, lepe, streme, bestis (=beasts), repeted, bequeth, precher, leest (=least), see (=sea) bayderoule (=bead-roll), waiker(=weaker),

但し上記には reading, speake, preach, meat の如き P.E. spelling をもつ variants もみられる。この PE ea [i:] は ME [e:] が 15th c. 末頃 [e:] となり 17th c. 後半 [i:] となつたという。

- c) ee... the (=thee), se, seke, greke or Greke, fre, grece (=Greece), mete, meked, seme, kepe, speche, heles, nede, nedes, ben, bene, sene, metely, fete, feding, tethe, dede, swetnesse, procede, betwene, indede, deades (=deeds), neadest (=needest), feale (=feel) gysse (=geese),

但しここでも sene, mete の外 seene, meete の形がみられた。この PE ee [i:] は ME [e:] が 15th c. 末頃 [i:] となつて今日に至つたという。

- d) ei... perceave, diceave, receive.

何れも Tyndale からの引例で French loan words である。16th c. の 'ea'-spelling が示すように ME [e:] を示す。この [e:] が上述の如く (cp. l.b.) [i:] となつた。

- e) eo... peple (但 people もあり)

この PE eo [i:] は, Norman French eo [ø] が英語に入つて unround されて [e:] となり, 之が他の [e:] と共に 15th c. 末頃 [i:] となつた。

f) ie...beleve, preste, releue(=relief n.) vnbelefe, greue,leuer(=liefer), felde.

元来 'ie' は Central Old French の spellingなので始め Fr.loan words だけに用いられて [e:] を示していたのが、同じく [e:] をもつ native words にも拡張されだした。この felde(=field), preste (=priest) の外 grief, piece, believe などさうである。尙この [e:] は前記の如く 15 th c. に [i:] となつた。

(2) [i]

a) e... Englonde (=England), english (=English).

ME ではすでに e [e] が [ŋk, ŋg, ndʒ] の前で [i] となり今日に至つた。stressed 'e' が [i] の音をもつのは今日では外に pretty のみ。

b) ee...byn (=been) 但 weak form.

c) i ...redle, steke, geve, geue, enches, prent, sence, sens (ともに=since).

この例の外 'i'を用いて PE spelling と異なる語も多い (e. g. riddle)。この音は大體 OE, ME を通じ今日まで変つていない。

(3) [e]

a) a... meany, meanye.

この meany (=many) は ME [máni] だから Mod. Eでは当然 [mæni] となるべきであつた。さうならなかつたのは名詞 many (OE menigeo) の影響だろう (Jespersen: Mod. Eng. Gram. I,3.213) とか any の影響だ (Wyld: Univ. Dict.) とか云われている。

b) ai... agenst.

今日は [ei] という spelling pronnnciation も行われている。Jespersen は [æi] から [ei] に移る途中 [e:] の段階で -nst のため shorten されて [e] になつた (M. E. G. I, 4.312) という。

c) e... lat, whan, than, astate, lasse, wrastlynge, healp (但helpeも) .

Tyndale には lat の外 let が, Elyot と Latimer には than, then 両

形がある。hinder, hindrance の意味ではつねに let が, allow の意味では lat, let 何れも使用されている。次に than と then は今日用法が分化しているが元来同根である。

- d) ea... bredthes, medowes, threten, redde or red (何れも p.p.), spred, already, lepte, brestis (=breasts), dred, endeouour, helth(e), fesaunt (=pheasant), welth, wetheringe, waipon (=weapon)

なほ read (p.p.) の形もある。PE ea [e] は前述の如く [ei] が [e:] となり, まだ [i:] にならないうち短くなつて [e] となつた。之は主に單綴語では子音が語尾で重なるとき, 又語尾が歯音のときに多い。

- e) eo... liberdes (=leopards)

この ME形には libbardsがある。PE jeopardy, Leonald の [e] は前述 [e:] > [i:] の前, 即ち 15th c. 前半に短くなつた。

- f) ie... frend(e)

この [e] は ME [e:] が [i:] となる前短くなつたため生じた [e] である。この短縮は friendship, friendly, etc. の母音が consonant combination の前にあるため生じたもので, 此が friend に及んだものである。

(4) [æ]

- a) a... then/hond, domage (=damage), stondeth/vainquished

hond の外 hande, handeling の綴もあつた。PE a [æ] は ME a [a] が 16th. c の終頃 [æ] にかわつたと云われている。then (=than) についていうなら PE then, than はもと同根 (OE thonne) だつた。PE stand, hand は ME では 'a' と 'o' の両形をもつていた。hond, stond は 'o' をもつ ME形から来ているのであろう。vain- は OF veincre から来ている。

(5) [ɑ:]

- a) a... person, meruel, sterue, tergate (=target), kerue (=carve), meruaile, ferre (=far) /maister (=master), maistry (=mastery).

この PE a [ɑ:] は final [r] 又は [r] +子音の前に在るもので, 古くは a [a] だつたのが一般的变化により [æ] となり, 之が [r] の影響で 17th

c. の頃 [æ:] と長くなり、この [æ:] が 18th c. に [ɑ:] となつたものである。この 'er' は当時の [æ:r] > [æ:r] を示している。maister, etc. について言えば、Chaucer で maister, OE で mægester となつている。

b) ea... herte, herken

発音は ME [e]+[r] であつたのが Mod E で [ɑ:] となつた。今日の -ear- の綴は 16th c. 後半からである。hart と区別するため heart とかくようになつたのかも知れない。

(6) [ɔ:]

a) o... gate (=got), nat or not/strenger, lenger

nat, not 両形をもつているのは ME (nat, not) の影響で、同じことは gate (<ME gat=got) にも云える。strenger, lenger は mutation comparison の例だが、今日は -er, -est の comparison となり [e] は noun form に残つている。

(7) [ɔ:]

a) a... foltred (=faltered)

PE a [ɔ:] は今日の spelling で云えば final [ɪ] 又は [ɪ]+consonant の前の a の音で、この音は ME [a] が [ɪ] の影響で ME の終頃 [au] となり、[ɔu] という中間の段階 —foltred はこの時期— をへて 16~17th c. の頃 [ɔ:] となつた。

b) au (aw) ... ought, nought, bravl (=brawl), haukes, hauking.

之は ME au [au] が [ɔu] という中間段階 —ought, nought はこの音を示している— をへて 16th c. 末から 17th c. 始にかけて [ɔ:] となつた。bravl, hauks, etc. はまだ [au] であつたかも知れぬ。

c) o... loordes, moare, moo, mo (3 者共=more), fourme, fourth forth, furth (3 者共=forth).

この group は ME [o]+final [r] 又は [r]+子音の結合におけるもので、この ME [o] が 16th c. に今の [ɔ:] になつたとされている。moo, mo に於ては [r] は明かに [ɔ:] に吸収されてしまつている。

d) oa... brode, abrode, sore (=soar).

この PE が示す [ɔ:] は ME [ɔ:] が [r] の前で [ɔ:] となつたもので、この音の正確な推移を決定するのはむづかしいとされているが、一般には [ɔ:] が一般音声変化で [o:] となり、之が [r] の前の他の [o:] 同様、17th c. に [oə] となり、18th c. 後半に [ɔ:], [əə] となつたとされている。引例は [o:] の段階に在るものと推定される。

e) oo... dore

この母音は ME [o:] であつたが、[r] のため [u:] とならず、[ɔ:], [əə] となつたと Wyld はいう。(Short History of English, §238)

(8) [ʌ]

a) o... doone, thorowly (=thoroughly)

b) oo... bloud(e) (=blood).

之は ME [ɔ:] が [u:] に高まり之が早く短くなつて [u] となり、次いで音声変化をうけ [ʌ] となつた。bloud は [u:] 又は [u] の音を示していると思われる。

c) ou (ow) ...contre, contrey, (=country); yong, yonge; florish

今日 ow は語尾、final l, n の前、語中では母音の前に用い、他の場合は ou を用いている。PE ou [ʌ] は ME [u:] から来ていて、この [u:] は diphthong [ou] となる—16th c. 初期—前に短く [u] となり、16th c. 後半から 17th c. の始めに [ʌ] となつた。

d) u... moch, moche, soch (但 suche もみられる), sonne (=sun), dome (=dumb), combred, nosell (=nuzzle), ontaught (=un-), sondrye, sprongen (=sprung), nombre, slomber, begonne (=begun), sodaynely/renne (=run), renner, rennyng.

この PE [ʌ] は ME [u] から来ていて 16th c. 末から 17th c. にかけて [ʌ] となつたという。なお renne は ME renne(n) をうけついだものと思われる。Wyld は infinitive と present の run が rinnen をうけつかず今日 run の形となつたのは ME p. p. runnen の影響だろうと云っている

(Universal Dict)。

(9) [u]

a) o... weoman (=woman)

この語の成立から云えば単数形も複数形と同じく今日 [wi] を持つべきところである。引例の weo- はこの [wi] に近い音を示している。cp. OE wifman > ME wimman. 尙この語が今日の綴と音をもつに至つた process は、[i] が [w] と [m] にはさまれて [u] となり、この [u] を示す文字は、前後に w, m があるためをとらず o としたという。

b) oo...loke, toke, boke, fote, fotemen, stode, under stode.

この音は ME [o:] が [u:] となり、後に短くなつて今日の [u] となつた

c) ou...could(e); wold(e), would(e); shold, shulde, should.

3者何れも unstressed position によく使われるところから、古い [u:] が [u] に短縮したものである。could(e) の l のない形は Tyndale に coudest (=could) がある。

(10) [u:]

a) o... doo, mooue (=move).

之は ME [o:] が [u:] となつたもの。綴はこの例にみるように古く oo と digraph であつたこともある。

b) oo...schole, scolemaster, fode(=food), to(=too), forsoth(=forsooth)

/rotes, folish, profe, hoeves (=hooves, i.e. hoofs).

food, root などの [u:] は ME [o:] から来ていて 15th c. 末 [u:] となつたという。

c) ou... thorow (=through)

この語は OE thurh, ME thurgh, thurugh から来ている。thor- の o は thur- の u の名残りと思われる。PE a. thorough と同根である。

d) u... true, truew, truth, trueth; blew (=blue)

PE true は OE tréowe, WS. tríewe, ME trew, trow, truwe で引例の variants も ME のそれから来ている。音は [ju:] を示してをり、後 [r] が

先行しているため 17~18th c. の交に [u:] となつた。

blew は, ME form も同じで, [ju:] を示し後に l のためやはり [u:] となつた。

(11) [ə:]

a) e...hyr (=her), cleargie (=clergy)

hyr は ME her, hir の後者の form を受けたと思われる。cleargie では ME [e] が次の [r] と共に [er] となつて early Mod E までつづき、之が 17th c. に [ər] となり次いで [ə:] となつたと云われる。

b) ea...lern (但 learn も), erle (=earl), harde (=heard), vnherd (=unheard), reherce, rehearse, sherch (=search), yornying (=yearning).

之らは何れも後に r がある場合で, ME では [e:] の形と [e] の形の両方があつたが, [e] の方は 16th c. から 17th c. にかけて標準語から姿を消し一方 [e:] の方は early Mod E で [ə] となり, 後に長音化して [ə:] となつた。

c) i...vertue, vertuous.

之は ME < O Fr vertú からで, 今日の vir- は Lat virtūt-(em) から生じた etymological spelling であろう。

d) o...warse; warke, werke (共に =work).

ME では wur- と綴られ [wur-] の音を示していた。引例では之が [wər-] に近い音だつたと思われる。[wə:] となつたのはその後である。

今日 o を用いるのは w の近く故 u を避けたもの。

e) ou...curtesie, curtesy.

古い French loan word で, 元の [u:] が [u] と短くなつて [kur-] となつたのが引例の音であろう。この音は 16.7世紀の交に [ər] となり, 次いで [ə:] となつた。一方 PE [kɔ:] の音は [u:] が短くならないそのままの [kur] から生じたもの。

f) u...pourgatorie (=purgatory).

引例の ou は ME [u] をやはり示している。この [u] は 16th c. 末から 17th c. 初にかけ [ər] となり次いで [e:] となつた。

(12) [iə]

- a) ea... eres (=ears), yeres (=years), clerer (=clearer), nere, fere, aferde (=affeared, afraid), appereth.

之らは ME [e:r] から来ているが、当時の正確な音価は定めがたく、当時の文法家によるも、まちまちであるという。

(13) [uə]

- a) oo... pore (pooreも)

ME [o:] から来た母音で [-o:r] の音を表していたようである。のち [o:r] は [o:ər] > [oə] > [uə] となつた。

(14) [eə]

- a) ea... bereth (=bears v.)

ME [e:] から来ていて引例は [be:r-] を示している。この [e:] は [r] のあるため [e:] > [i:] とならずそのまま、残り、17th c. に [e:ər] > [eə] となつた。

(15) [ei]

- a) a...straung(e), daunger, saulfe (=safe)

引例の -au- は [ɑ:] 又は [ɔ:] を示していたと思われる。何れも Fr からの借入語で -au- は ME の綴をとらめている。この音は [ndʒ] を従えている場合後で [ei] となつた。saulfe の l は語源綴。ME sauf には f の前の u のおちた sāf ができ、之から PE [seif] が生れたと中島教授 (『英語発達史』P. 105) はいわれる。

- b) ai (ay) ...ley (=lay a.), maynteyne, niayntene, susteyne, conteyn, pertene, grehoundes (=grayhounds)

之らは何れも今日の [ei] だつたと考えられる。尙 agenst (=against) には [ei] と [e] の2様の発音が今日行われている。

- c) au...gage (=gauge) .

この語は O Fr au [au] が ME 期中に [dʒ] のため [a:] となり、次いで [æ:], [e:] をへて 17th c. に [ei] と 2 重音化した。アメリカでは, gage と綴られている。引例は [ei] を示すと思われる。

d) ea... ye (=yea), grete (=great), yee (=yea)

PE yea は nay の analogy によつて [ei] となつた。

e) ei (ey)...regne, pray (=prey n.), grehounde, conuaied.(=conveyed)

(16) [ai]

a) ei...ether, nether.

ME ei [ei] から来ている。今日 [ai], (i:) の両形がある。[i:] は北方英語からきたと云われるが [ai] の origin については諸説があり Wright は “of unknown origin” といつている。

b) i...frere (=friar)

ME は frēre という同じ form である。音は [ei] に近いものであろう。

この [ei] が後に [ai] となり [air] > [aiər] > [aiə] の process をとつたと考えられる。

(17) [ou]

a) eu (ew) ...shew (=show)

今日 sew と shew が [ou] と発音される。show と shew は夫々 ME shownen, shewen の綴を受け、音は 1 方だけ今日残つたのである。

b) o...goo, mooste, moost; toulde.

go, most は 17th c. に [ou] となつた。16th c. 前半では [o:] だつたと云われる。told は ME o [o] が late ME に [ou] となり次いで今日の [ou] となつた。

c) oa...cote (=coat)

之は ME o [o:] に由来するもので、この音は 16th c. 前半に [o:] となり 17th c. に [ou] となつた。

d) ou (ow) ...awne, shew (=show), pultrie (=poultry).

awne (=own) は OE ágen から。shew は前述。

(18) [au]

a). ou (ow)…proude, prowde, thousande, thowsande, doune (=down),
expowned (=expounded).

ME [u:] から由来し, 15th c. 後半 [uw] となり, 16th c. の初 [ou],
17th c. 初 [au] となつた。expowned の d の脱落については cp. ME
expoun(d)en < Lat. expōnere, 'to set forth, explain'.

(19) [ju:]

a) u…dewe (=due). cp. blew (=blue) (cp. 9. d)

以上 stressed syllable における母音字に関する spelling は 1 応終つたが,
ここで母音字の脱落付加 (PE を規準としたる) についてふれてみたい。

a, i, u…stress のない音節で 'a' がおちているのに prentyse (=apprentice)
がある。cp. Chaucer, 'prentis'. 同じ例は pistle (=epistle)。逆に
chapiter, gentilman, capitayne, palacies (=palaces) では 'i' が付加さ
れている。

因みに PE gentle の ME 形は gentil (< Lat. gentilis) である。又 PE
chapter, captain は夫々 Lat. capitulum, capitāneus から。更に batayle
(=batte), castell (=castle), idell (=idle), monstrous がある。

(I) 子音字 (Consonant letters)

前例にならい初めに PE letters を掲げ, 次に之に相当する letters を用例か
らとることとする。ここでも PE と同じものは採らず異なるもののみを挙げる。

(1) PE c

a) s…practyse(n.), pasis (=paces), daunsinge (=dancing), counsell
(=council), advise (n.).

PE advise, advice の使分けはまだ当時確立していなかつた。

b) sc…disceave (=deceive)

c) ck…logycke, metaphisick.

d) k…keretike, catholike, kerue (=carve), Logike, rethorike.

e) que...heretique. -que は Fr. style.

(2) PE ch

- a) c ... scolemaster, cronycle.
- b) k ... stomakes.
- c) tch... rytche (=rich).

(3) PE ck

- a) k ... steke (=stick), striken (=stricken).

(4) PE d

- a) 脱落...knowlege, wensday (=Wednesday), expowne (expound),
auenture (v.) perauenture, miniyshe (=diminish), disporte
(=sport).

最後の2例では di- がおちたり, ついたりしている。

(5) PE f

More と Latimer に of (=off) がある一方, of (=of) もあつて形の上で
区別できぬが, 元来両者は 14th c. 以前音も綴りも同じであつた。又 Tyndale
には iff (=if) があり, Elyot に fesaunt (=pheasant), hoebes (=hoofs)
がある。

(6) PE gh

- a) g... gostly (=in spirit, spiritually).
 - b) 脱落...thorow (=through), delyte (=delight).
- 但 Latimer には 'thorow' と共に 'plougheyng' もある。

(7) PE gu

- a) g... tonge, begile, tong, prologes, garde, plaged, gesse.
- 元来 gu- は [g] を表すため Fr. scribes が用いたものである。

(8) PE h

- a) wh...whome (=home).
- b) 脱落...ypocrite, cronycle, rethorike.
- c) 付加...abhomynable, hable (=able), Corrhinthians.

hable については, cp. O Fr. habile < Lat. habilem.

(9) PE j

a) j … 前述。尙 PE で語頭に [dʒ] をもつ語はすべて Norman French から来ている。

b) g… popyngay, gestinge.

源語的には gesting が正しい。

c) hi … Hieremy, Hierusalem, hierom (= Jerome).

(10) PE k

a) ck… worcke, worckman.

b) qu… manqueller (i. e. mankiller).

(11) PE l

a) 脱落… falkon (= falcon), soudiour, (= soldier). coude (= could),
wordly (= worldly), rybaudry (= ribaldry) .

尤も souldiour と l をもつ形も Elyot にある。同じく彼の batayle, bataile (共に = battle), castell (= castle), idell (= idle) は今日何れも syllabic 'l' になつている。

(12) PE p

a) b… liberdes (= leopards).

b) 付加… accomptes (= accounts).

c) 脱落… South-hamton. この語は今日でも careful pronunciation の場合を除けば p は silent である。

(13) PE s

a) c… sence (= sense), counsell (= counsel), treatice, encrease (= increase). 尤もさいごの語には -se の形も見られた。

b) sc… sclauder (= slander).

'c' の付加については cp. ME sclandre, Lat. scandalum つまり scandal はこの語と doublet をなしている。

c) sh… sherch (= search)

この sh- は Fr chercher の ch [ʃ] の影響か

(14) PE sh

- a) c... facion, faccion, (= fashion).

(15) PE t

- a) c...PE -tion で終る語に特に多い。Tyndale から例示すれば
promocion, dispensacion, tribulacion, persecucion, vnsaciable,
imaginacion, interpretacion, excepcion, tradicion, exposicion, intenc-
ion, proposicion, assumpcion, fornicacion.

尤も -tion 形もある, e.g. affection, exhibition, vocation, congregation,
edification.

- b) th...Sathan, rethorike. cp. Anthony & Antony

(16) PE th

- a) t... autour, auctour, auctor, (共に = author) , auctorite, autorite (= 共に authority) .

ME 形は au(c)tor, Lat. 形は auctor. なほ More に author, authoritie
がみられる。

- b) d... Adelstone (= Athelstan) .

この d は [ð] を写したものの。

(17) PE v

- a) f...actife (Elyot) .尚 More に oure-selfe, themselfe, Elyot に them-
selves があるが, Tyndle には youre-selves, them-selves がある。

- b) u... 前述。

(18) PE wh

- a) h... hole (= whole, entire) , holsome (= wholesome) , hole (= health-giving) .

(19) PE z

- a) s... hasardes, nosell (= nuzzle) .

以上で子音字について大体のべたが, その脱落には他に damme (= damn,)

doute (=doubt) が Tyndale にある。更に彼に yer (i. e. ere, before), shalbe(=shall be),sprite(=spirit), y^e (=the), y^t (=that), y^u (thou), w^{ch} (=which), wth (=with), & (=and) が, Elyot に in-to, a-nother, there-vnto, sith (=since) が,More に elles (=else), at ones(=atonce,) onely (=only) が, Latimer に now a-dayes (=nowadays) のような面白い spelling がみられる。